

## 研修報告書No. 1 9

県外大学研修医

〇〇病院から参りました2年次研修医です。12月の1ヶ月間、□□病院で研修させていただきました。高知県に来たのは初めてでしたが、四国は暖かい印象があったので、◇◇地域の寒さには大変驚きました。

□□病院内では主に、指導医の先生と一緒に病棟の患者を担当させていただきました。平均年齢は80歳前後のため、高血圧や糖尿病、肺気腫など、基礎疾患を抱えている患者がほとんどで、一つの診断名では説明が付きません。「診断名をつけてしまうと頭がそこだけに集中してしまうので、どんな病態が推測されて症状がでているのか、複合的に考える必要がある」と話していた上級医の言葉が残りました。

また、診療時間中の救急外来患者の初療も担当させていただきました。救急隊や家族から状況を聞き、患者を問診・診察し、必要な検査までもわたしたち研修医に判断する機会が与えられました。検査を終了した時点で、現在考えられる診断・病態と、今後の方針について上級医に相談します。普段大学病院ではなかなか経験できないため、非常に勉強になりました。一年目市中病院にいた私ですが、救急車で来院した患者の検査まで自ら判断して行うことはなかったので、貴重な経験でした。

1ヶ月間、充実した研修プログラムを組んでいただいたので、□□病院外での研修もできました。出張診療所は□□病院よりも更に山間の地域に数カ所あり、診療所として始めから建てられたところもあれば、公民館や集会所を利用して当日だけ診察台を設置するところもあります。出張診療所研修では、私たち研修医が実際に患者を診察します。比較的健康だが運転はできないような高齢者が中心ですので、定期処方を受け取る患者が大半を占めます。安定した患者とはいえ大きな木造机に座って実際に診療していると、「来年はこうして一人で外来患者を診ていくのか」と、そろそろ初期研修が終わる実感と不安な気持ちが押し寄せてきました。診療所を出ると、山や川が目飛び込んできて、スーパーも銀行も郵便局もないここに果たして自分は住めるのか疑問でした。

訪問診療や訪問リハビリにも同行させていただきました。どんな家でどんな生活を送っているのか、お宅を訪問すると分かります。また、病院でみる患者が、自宅に戻るとしゃきっとして、足元がおぼつかなかった方がきびきびと動く姿には驚きました。患者は病院に来ると、さらに患者らしくなるのかもしれない。

△△診療所での研修も非常に勉強になりました。そこでは高知大学医学部附属病院の総合心療部の先生方が日替わりで診療をしているため、毎朝skypeで申し送りをしている様子や、高知大学医学部附属病院からでも閲覧出来る電子サマリーが印象的でした。僻地だからこ

そ、インターネットを上手に利用して情報共有することが大切なのだと実感しました。

◇◇地域はすでにかかなりの高齢社会ですが、日本全体が今後◇◇地域のように高齢社会になっていくとすれば、現状のように医療資源が使われていては医療経済が崩壊してしまうはずでず。かかりつけ医をもつ、予防医学を広めるなど、医療における課題もさることながら、都市部への人口流失や少子化をとめなければ、根本解決にはなりません。若い世代が地域に残るには、どのような地域が望ましいのか。地域医療は社会全体で考え、営まれる必要があるのだと学びました。

高知県は新鮮な食材が豊富で、自分なりに堪能出来たと思います。私は群馬県出身なので、新鮮なかつおの塩たたきを一口食べたときの感動は言い表せません。また、見知らぬ土地で過ごしたことで、自分の地域を見つめ直すことができたような気がします。

最後になりますが、□□病院および高知医療再生機構のスタッフの方々、高知大学医学部附属病院と自治医大の先生方に厚く御礼申し上げます。御陰様で充実した 1 ヶ月間となりました、ありがとうございました。